平成３０年度 第２回 平塚市美術館協議会 会議録

■開催日時　　平成３１年　3月１２日(火)　１４時００分～１５時４３分
■開催場所　　平塚市美術館　研修室
■出席者　　委　員　　水沢勉、吉村維元、瀬高真一郎、林孝之、成重千惠子、
　　内田尚子、岩崎由紀子、青木智明
　　事務局　　高橋社会教育部長、草薙館長、平井副館長、土方学芸担当長、勝山学芸員、
　　江口学芸員、家田学芸員、所管理担当長
■傍聴者　　なし
■会議の概要
　１　開会
　２　社会教育部長挨拶
　３　議題
　（１）平成３０年度事業報告について
　　これまでの事業報告（事務局から説明）
　　○作品　○展覧会　○教育普及　○その他の事業　○施設利用者等の統計
　（２）平成３０年度奏プラン事業の点検評価について
　（３）平成３１年度事業予定について
　　○展覧会　○教育普及
　（４）その他
　４　閉会

■社会教育部長挨拶
　委員会開催にあたり、社会教育部長から挨拶があった。

■議題及び質疑
（１）平成３０年度事業報告について
◆下期の作品、展覧会事業、教育普及事業について、内容・会期・関連事業を事務局から説明。
◆その他の事業、施設利用者等の統計の内容を事務局から説明。
（２）平成３０年度奏プラン事業の点検評価について
◆平成３０年度奏プラン事業の点検評価について事務局から説明。
（３）平成３１年度事業予定について
◆平成３１年度事業予定について事務局から説明。

（質疑）
委　員　対話による美術鑑賞事業はいつから行っているのか。また、職員体制に変わりはないか。
事務局　この事業は平成２７年度から実施している。職員体制はほぼ変わっていない。
委　員　これまでの学校側からの評価はどのようなものか。それに対する受け止めはどんなものか。

事務局　学校の授業時間にお邪魔して行っている。基本的に少人数のグループで絵を見るということをやっており、そこにボランティアが１名ないし２名入っていく形式をとっている。なかなか大勢の大人が授業に入っていくことはないので、ひとりひとりの子どもの様子をよく見ることができることや、話をすることが苦手な子どもも気兼ねなく話をする姿が見られることなどのことから、先生方にも楽しんでいただいているようだ。また、美術館に来て本物の作品を見る実体験ができることも、評価いただいていると考えている。

委　員　この事業は各学校に浸透しているのか。

事務局　徐々にではあるが浸透してきていると考えている。例えば、１年目に実施した学校の教員が他校に異動した際、異動先でもやってみたいという声を頂くことがあり、認知されてきていると考えている。

委　員　期待している。継続してやっていっていただきたい。

委　員　本校では昨年も今年も開催している。子どもは安心して自由な発想、素直な発想を出している。ここでは何を言っても受け入れられるという安心感がある。いろいろな視点で子どもはすぐに話すのだが、それをボランティアの方がすべて受け入れてくれて、繋いでくれて、すごく盛り上がっている。美術鑑賞ばかりでなく、コミュニケーションや安心して発言できるなど、そういう意味ですごくいい場だと感謝している。都合が合えば、毎年取り入れていきたいと考えている。

委　員　助成金の内容はどんなものか。

事務局　今回の助成団体が展覧会を助成するのは年に１本の展覧会である。しかし、総予算の半分という多額の助成が行われるため、多くの美術館が助成に手を挙げるが、展覧会の内容を厳しく吟味されることや非常に煩雑な手続きを経て申請することになる。

委　員　今回の展覧会は４館で行うということだが、そういうことも助成の判断となるのか。

事務局　この展覧会の助成については、地方の美術館が３館以上で共催することが条件である。また、ワークショップなり、ギャラリートーク等も含め、その地域の市民に直接文化的な恩恵が還元されるプログラムを組むことも助成の対象となっている。また、営利目的の性格を含む展覧会は一切、対象とならないこととなっている。

（４）その他

会　長　今回の会議の全般を振り返って、各委員から一言ずつお願いしたい。

委　員　点検評価について、委員から出された意見がすべて忠実に反映されてあった。我々の意見が行政に反映されることを期待する。

委　員　年々、展覧会等の企画が良くなってきて、市民として楽しみが増え、これまで興味がなかった人も足を運んでくれている。今後も期待している。

委　員　タグチ展で図録がなかったが、図録作成について何か基準はあるのか。

事務局　タグチ・コレクションの書籍が既に市販されていたため、図録作成はしなかった。図録作成は、展覧会資料や観覧者サービスという観点から展覧会ごとに検討している。

委　員　今年度の夏の展覧会は記録的な観覧者の方に御覧いただいて、大変素晴らしいと受け止めているが、正直なところ、観覧者数の予測はどのくらいだったのか？多すぎたのか、物足りな

かったのか。想定数はどのくらいだったのか伺いたい。ただし、来年度以降は１６万名を評価の基準にしなくてよいと考える。恐らく観覧者数は１６万名よりは少なくなると思われるが、それが評価になってはいけない。恐らく、来年度同時期の企画展もそれに相当する素晴らしい企画になると期待している。前回も話したが、観覧数だけで展覧会が評価されるべきではないと考えているが、１６万名という数を観てしまうと、特にそのような気持ちを持った。来年度の安野光雅展に期待している。

事務局　美術館の観覧者数の目標は年間１０万名であり、深堀展については３万名を切る程度と考えていた。しかし、６万名となると最後の方は１日４千名も入っており、当館の規模からすると、あれだけの人数が入ると事故や作品の保全という点でも厳しい。年間１０万名でもかなり頑張っている部類だと考えている。今後は、数よりも内容を濃くしていく。例えば、鑑賞教育のような少人数で手間はかかるが、ひとりひとりの心に残るようなものを少し増やしていくことも考えていきたい。

委　員　安野光雅展に期待している。絵本作家でもあるので、小・中学生にとって非常に興味深いものだと思う。観覧者数は年齢別には見ていないのか。また、ひらビー等でも展覧会前に安野光雅を取り上げてもらい、その後、美術館で本物を見てもらえるとよいのではないか。

事務局　観覧者数の統計では年齢別にカウントしている。また、小・中学校には全校にチラシを送付する予定である。各種行事、ワークショップ等については、検討をしていきたい。

委　員　子どもたちが本物に触れる機会をたくさん広げられ、興味が沸く内容を工夫され、今の子どもにとって非常にいい環境である。学校でも子たちに美術を楽しむ気持ちが湧き、本物に触れることができるような働きかけをしていきたいと思う。

委　員　今年度の事業報告では、実績や事業内容が前回よりわかりやすかった。公立美術館として、活動実績は他と比べて個人的には充実していると考えている。先ほど、事務局から質の向上を目指すとの発言があったが、そのことに関しては期待していきたい。それを踏まえて少し気になったのが、先ほどの点検評価で他の方がコメントを出されていたが、広報などのバックアップ体制に問題はないか伺いたい。先ほどの報告を聞く限り、広報が夏の展覧会で観覧者数をボーナス的に増やしたのは、大きな要因はテレビ頼りというのが事実ではないか。現在の人員と予算の限られた中では、ある程度的を絞って、展覧会活動は質の向上にシフトしていって、広報に力を入れていくと、すごくいい活動内容をより強みを打ち出していけるのではないか？テレビ頼り的なＰＲではなく、いま美術関係の印刷物もかなり厳しい状況なので、美術館が主体となるような情報発信ができると、いい内容がより多くの方に還元されると考えている。

事務局　広報に大きな予算が割けない中、テレビ、新聞、雑誌に頼っているのが現状である。また、広報に関して言えば、先日、新聞の週末イベント情報に博物館も美術館も出ていないとの指摘を受けた。我々、もちろん積極的に広報活動はしているが、事情を聞いてみると、各美術館で広報予算が厳しい中で無料の媒体に集中してしまい、紙面の都合ですべてが掲載されないということだそうだ。一方で、大きな美術館では専任の学芸員を配置している美術館があり、やはり、彼らは上手な広報活動を行っている。当館では一人の学芸員が受け持つ担当業務の一つととして広報活動を行っているが、非常に丁寧な作業をしている。個人的には同じ

規模の美術館に比べると、各メディアに取り上げられる機会は多いと考えている。限られた人員と予算の中で、ある程度の観覧者となったので、今後は、内容を吟味していきたい。

会　長　議論は尽きないが、皆さんの意見を聞くのは大事だと考え、委員それぞれに伺った。１６万名を超えたということは企画の大変な成功だと考える。ただ、助成金の話では基本的に儲けてはいけない。コストパフォーマンスも考えて企画しなければならない。これは公立美術館の宿命でもある。なかなか、儲かる人ばかりを入れられることはできないだろうが、コレクションの充実もさせなければならない。数字を見て少し寂しいのは、コレクションを使った特集展の時は観覧者数やワークショップやギャラリートークの反応が少し薄い。これを濃くしていかないとバランスが悪くなってしまう。華やかな企画の時は話題になっているけれど、静かに絵が見られるときの時間がなんとなく影が薄くなる。そのためには少額でもいいから作品を購入して、『これが新しい作品です。』と皆さんにお見せして、学芸員が説明する、そして、教育に使う。そういう部分の普段着の活動をきちんとしていくということが、美術館が続いていく最大の条件ではないか。そうしないと、貸会場と同じ道を歩んでいってしまう。美術館には所蔵品を守っていってほしいという気持ちがあり、工夫もしていただきたい。確か、地域創造などでもコレクションを全面的に活用することで提案すると、助成される場合がある。どうしても所蔵品展になかなか予算が付きにくいと思うが、所蔵品のメリハリを付けると、何か所蔵品の話題性が出せると思う。内容についてはいろいろな工夫がされている。来年度の鳥海青児は寄贈ではあるが、すごいチャンスになるのではないか。その地域に生まれた最大の画家であることは間違いないので、平塚の誇りとして、うまく説明し、解説し、来年の所蔵品展に期待する。

事務局　現在は、美術館も市民の皆さんに認知されてきており、良くなってきている。ただ、長くなると展覧会もマンネリ化に陥ってしまう。正直なところ、もっと考えていかなければならない時期に来ていると考えている。

委　員　作品購入の予算が厳しいということだが、美術館には湘南フレンズ倶楽部という市民サポート団体がある。年会費も少ない金額で加入でき、大勢の方にご参加いただいている。会費を貯めて、その中から僅かではあるが、作品を購入し美術館に寄贈している。是非、大勢の方に関心を持ってご入会いただき、よりよくしていきたいと思っている。

事務局　湘南フレンズ倶楽部からは既に絵画を寄贈いただいており、エントランスにある三沢厚彦氏のユニコーンも、ゆくゆくはご寄贈いただく予定となっている。

会　長　地域のコミュニティがサポーターとなって、マネジメントもしてもらえるというのは健全である。新しい作品が入るのは学芸にとっても、どんなに小さい作品であってもすごく目が覚めるような出来事である。やはりそれが繰り返されることは期待している。

■閉会

館長より閉会を告げた。

以　上